

社会的スキル研究の現況と課題

—「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて—

石 井 佑 可 子

1. はじめに

社会性を測定する指標の一つに「社会的スキル(ソーシャルスキル)」があり、重要視されている。社会的スキルという概念は大まかにいうと、「社会的、特に対人場面における適切な行動が個々人の持つ『技術』によって生み出される」という考え方を基本としている。多様な領域における研究で、社会的スキルは様々な社会的適応と関係することや、より良い社会生活の必要条件であることが主張されている。一般的な関心も非常に高く、今後も発展が期待されているテーマだといえよう。しかし、各研究で取り上げられている社会的スキルはどれだけ実際の対人場面に即しているのだろうか。また私たちの日常生活における現実的な意味での適応とはどのくらい関係するのであろうか。ここでは社会的スキル研究の流れを概観し、現時点での課題を示す。また、類似概念であるEmotional Intelligenceとの重なりと差異を考慮しながら社会的スキルの役割を整頓し、さらにはその効果を補助・強化する概念として「メタ・ソーシャルスキル」概念を提案する。

2. 社会的スキルの定義

社会的スキルとは何を指すのかという定義や、その中で重視する部分は研究者によってまちまちであり、明確に統一されたものではない。1970～1980年代には多くの研究で社会的スキルの定義が盛んに提案された(Spitzberg, Cupach, 1988 ; 菊池、1988・堀毛、1990・相川、2000など参照)。堀毛(1990)はその年代に見られたソーシャルスキルの定義をまとめ、スキルは①安定した能力か、場面によって変化する対処行動か②認知的・情報処理的か行動的か③プロセスか行動要因の集合かにおいてそれぞれ対比されるとしている。また相川(2000)は定義を①行動的側面を強調したもの②能力的側面を強調したもの③その他 に分けており、自らはその他の行動・能力共を含む「過程」として社会的スキルを捉える立場をとっている。こうした分類からも社会的スキルの定義がいかに多様であるかが窺える。最近では特に定義の統一を目指す動きは見られておらず、研究者がその目的に応じて各自簡潔に設定するにとどまっているようである。

3. 社会心理学分野での社会的スキル

社会的スキルの定義があいまいな理由の一つに、この概念を利用する領域が多岐に亘っていることがある。もともと社会的スキルは複数の起源を持っており、臨床心理学・社会心理学・教育・発達心理学などの分野ではほぼ同時期に誕生した。

社会心理学領域はその中心的分野の一つである。以下は社会心理学領域での社会的スキルを中

心にとりあげていく。この分野での社会的スキル概念はArgyle (Argyle,1967 ; Argyle& Kendon,1967) の「社会的相互作用中に生起する一連の個人的行動は、便宜的には一種の運動スキルと見なせる」という示唆から始まった。彼は運動スキルに倣って、社会的スキルのモデル (図1参照) を提案した。

また、社会的スキルの大きな特徴として「スキルは学習によって獲得できる」と考えられているため、求められる社会的スキルを訓練によって獲得させるソーシャルスキルトレーニング (Social skills training、以下SST)のプログラムも多く提案された (Argyle,1967;Trower,Bryant & Argyle,1978など)。

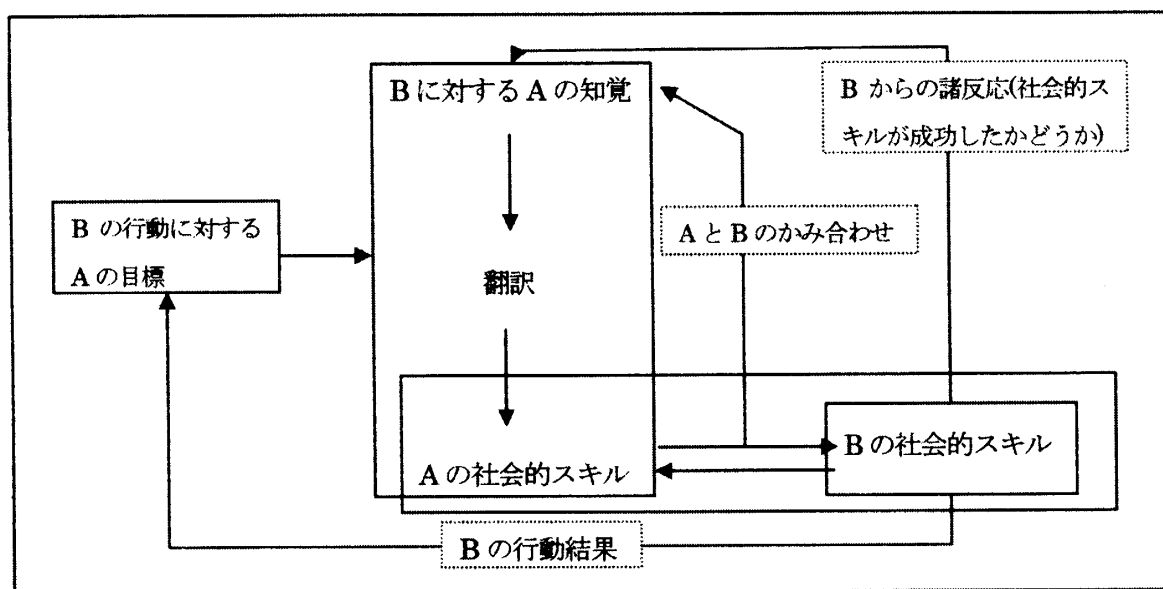


図1 Argyleの社会的スキルモデル(Argyle,1967を元に作成)

4. 社会的スキルとEmotional Intelligence

社会的スキルは定義が多様なのに加え、類似概念との峻別も難しいが、その類似概念の一つとして、近年注目されているEmotional Intelligence (以下EI) が挙げられるだろう。EIは概念的に社会的スキルと非常に近い部分を持つ。以下にEIについて簡単に概観し、社会的スキルとの関わり、その異同について述べる。

EIはMayer&Saloveyによって「社会的知能 (Thorndike,1920) の一部であり、自他の感情・情動を観察(monitor)する能力、感情・情動を正しく識別する能力、思考と行動を導くためにその情報を利用する能力」と定義された(Mayer, DiPaolo & Salovey,1990; Salovey&Mayer, 1990)。後に定義は何度か改訂され、最近では①自他の情動を正しく知覚する「情動の知覚」、②情動情報を利用して思考を進める「情動による思考の推進」、③情動とそれらの関係を分析し、それによって起こりうる事を察知・またその結果を理解するという「情動の理解」、④感情を回避したり、自己の平静の為に価値判断をし直したりする能力を含む「情動の管理」からなる4領域モデルがまとめられている。Mayerらは、EIを有している人間は良好な精神的健康を得ることができ、また自分の情動を正確に知覚し、その人にとって重要な目標へ向かうのに完全で高度

な手段を使うことができると主張している(1990など)。EI概念はMayerらの提案後、サイエンス・ジャーナリストのGoleman(1995)がまとめた一般向けの読み物「Emotional Intelligence (邦題「EQ 心の知能指数」土屋京子訳、1996)」がベストセラーになり、爆発的に注目を浴びた。それによってEIに多大な関心が寄せられるようになった。日本においても「EQ」として一般的に広く知られている。

しかしこうした経緯の弊害か、現在EIは概念・定義が研究者によってあまりにも異なり、非常に広範で一貫性を欠いたものになってしまっている。Mayer, Salovey, & Caruso (2000) はあまりにも多くなされているEIの定義の中でも、彼らの主張してきた能力モデルではない、種々の「良い特性」を寄せ集めただけの定義を「雑多モデル(mixed model)」と呼んで非難している。彼らの言う通り雑多モデルには受けを狙った、大げさで非科学的ともいえる定義が混在している。そのためこうしたモデルによるEIは適応的な性格特性を集めたに過ぎない、極端にいつてしまえば数々の適応の指標から逆算してきたかのように定義されてしまっている。このような捉え方では心理学のテーマとして研究することがもはや困難である。実際、各モデルのEIについてはいくつもの測定尺度が作成されており、適応と関係するという結果も報告されているが、その測定尺度自体の妥当性が低く信頼性に欠けるものが多い(Ciarrochi, Chan, Caputi & Roberts (2001) のレビューなど参照)。

しかしその一方で能力モデルによるEIの方も、彼ら自身が次々と定義を変化させており (1990, 1997, 1999など)、意味が一定しない。このあいまいさ・捉えにくさについて、能力モデルのEIについても批判がなされている (Izard, 2001など)。

社会的スキルとEIとの関わりについては、積極的に論じた研究があまりなく、ここでも定義分け・線引きがはっきりしないまま放置されている。相川(2000)は社会的スキルを他の類似概念と区別する際に、EIは社会的知能の一部であり、その社会的知能は社会的スキルよりも包括的でより上位にある概念だとしている。しかし、EIと社会的スキルを同列に、もしくは混在して考える研究も少なくない。例えば雑多モデルの一つに挙げられているBar-On(2001)の定義には、EIの中に社会的側面も含め、対他者・対自己スキルを設定している。また、教育場面ではEIを育む Social and Emotional Learning(SEL)が提案され、その獲得プログラムが作成されている (Lopes & Salovey, 2004など)が、ここではEIを幾つかのスキルのまとまりとして捉え、情動スキルと同列に社会的スキルも設定されている。

しかしEIと社会的スキルははっきりと区別されるべき点があるのではないか。一つにはEIが知能の一つとしての概念化を目指してきたところにある。Mayerらが常に主張しているように、あくまでEIは「情動についての能力・知能」である。EIがコンピテンスに重きを置いているのに対し、社会的スキルは様々な定義があるものの、基本的には実際の対人反応が行われること、つまりパフォーマンスを主眼においている。またEI研究が実際の行動に重きをおいていない一方で、社会的スキルではEIの定義にあるような思考・認知に対する影響については関心が向けられていない。

また、EIは情動に関する能力なので、情動の表出を伴わないコミュニケーションについてはその範囲の及ばずところではないと考えられる。日常生活場面には「情動伝達を伴わないコミュニケーション」がなされることも多いだろう。そのような状況でのコミュニケーションには、EIと

社会的スキルのうち、社会的スキルのみが関連すると考えられる（勿論、EIが間接的に影響する可能性は十分にあるだろう）。

EIは決して我々の生活や適応の全てをカバーしているのではない。こうしたEIの働きが及ばない部分こそ、社会的スキルが独自に効果を発揮すべきところだと言える。以後に社会的スキル研究の現況として、その測定・適応との関わりについて述べていく。

5. 社会的スキルの測定

社会的スキルの測定は方法の簡便さから自己報告型が頻繁に使用されている。わが国で現在広く使用されている自己報告型の尺度としては、菊地 (1988)の「kiss-18」が挙げられる。これにはGoldsteinの挙げる6種類の社会的スキル①会話を続けるなどの「初歩的なスキル」 ②参加する・謝るなどの「高度のスキル」 ③感情を表現するなどの「感情処理のスキル」 ④他人を助ける・和解するなどの「攻撃に代わるスキル」 ⑤非難を処理するなどの「ストレスを処理するスキル」 ⑥目標設定などの「計画のスキル」 —菊地(1988)より引用) を基にした18種類の社会的スキルの項目があり、「いつもそうだ〜いつもそうでない」の頻度を回答する形式となっている。

他には和田・堀毛らの尺度がそれぞれ挙げられる。和田 (1991) の「ソーシャルスキル尺度」はBurmester,Furman,Wittenberg & Reis(1988)の「interpersonal competence questionnaire」を基に作成されたもので、対人課題領域における言語的な対人有能性を「親密関係維持」「関係開始」「自己主張」による3因子25項目で測る形式となっている。堀毛(1991)はSpitzberg & Cupach(1988) らが分類した社会的スキルの段階のうち行動面に焦点をあて、 会話をうまくすすめる などの「記号化」、言葉がなくても相手のいいたいことが何となく分かる などの「解読」、相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度に出さない などの「統制」からなる3つの基本スキル15項目からなるENDE2を作成している (堀毛,1994)。

6. 社会的スキルと社会的適応との関わり

最初に述べた通り、これまで多くの社会的スキル研究で社会的スキルが実に多様な社会的適応と関係すると報告されている。一例を挙げると、社会的スキルの高さは仕事面での誠実さ・職務遂行能力・給料 (Witt&Ferris,2003)や、コンピューターを介したコミュニケーションにおける精神的健康(五十嵐、2002)と関係することが報告されている。反対に社会的スキルの欠如は、精神的健康の阻害 (Argyle,1967など)、抑うつ(Segrin&Abramson,1994など)、孤独感(相川、2000；和田、1991など)など、様々な不適応状態につながる事が明らかにされている。

またこのような不適応との関連について、特に最近「反社会性から非社会性へ」研究関心が移行していると庄司(1994)は指摘する。逸脱行動や攻撃などの目立った問題だけではなく、引っ込み思案や孤立などの比較的目に付きにくい問題についても焦点が当てられている。社会的スキルは特別な状況だけではなく、ごく一般的な生活においても主要な位置を占めるようになっているのである。

さらに、臨床分野ではSSTが大いに発展している。当初その対象は不適応の治療を目的とした精神医学領域の患者であったが、小学校において学級単位で行うもの(藤枝・相川,2001；Zsolnai&Jozsa,2003)や、大学生を対象に実験的に行うもの(相川,1999)・大学教育の一環とし

て自ら希望する学生を対象に実習形式で行われるトレーニングも増えてきた(大坊・栗林・中野, 2000; 後藤・宮城・大坊, 2004など)。ここでも社会的スキルに対する注目の高さ・一般生活への応用意欲が伺える。

7. 社会的スキル研究における課題

広く概念が利用されている社会的スキルではあるが、その奥の有用性にはいくつか疑問が残る。SST及び社会的スキルの弱点として、長期的な効果や実際の生活への一般化が見込まれにくいということがある。SSTの効果について、研究者達は短期間の行動変容には効果を認めているものの、一般的な見解として効果の維持や日常生活への般化に関しては疑わしさが残るとしている(Marzillier, 1978; Trower, 1995; 相川, 1999など)。トレーニング効果の維持・般化を高めることがSSTに課題として残されているのである。また、関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響について、大学生を対象として調べた実験研究でもその傾向は伺える(木村・磯・大坊, 2004)。関係が長期的に継続すると予測できる相手とのコミュニケーションにおいて、コミュニケーションスタイルや会話満足感・会話中の相手に対する評価・自分への評価はkiss-18によって測定された社会的スキルの高低による違いが見られなかった。この結果について木村らは社会的スキルは「一期一会」の出会いに効果を発揮するものと考察しているが、裏を返せば社会的スキル(及びその獲得トレーニング)はその場限りの一時的な効果を持つものにとどまっているといえるのではないか。

前述の通り、近年では一般的な対人関係に関わる社会的スキルが特に関心を集めているといえる。そのためには我々の普段のコミュニケーションに対応し、また実際の生活における適応を説明するような社会的スキルを考慮しなければならない。

測定尺度にも表わされているように、現在の社会的スキル研究では社会的スキルを有している指標として、スキル行動の「表出」を現実にとどれだけ使っているかの単純な「使用頻度」が中心に取り上げられ、その度合いと社会的適応との関係が検討されてきた。逆に、社会的スキルを使う頻度が少ないことは不適応だとされている(Trower, Bryant & Argyle, 1978など)。

また、測定の項目に社会的スキルとして取り上げられているのはどのような人間関係にも共通して有用なスキルや、友人関係などある特定の関係に限定して通用するスキルで、いずれも暗黙裡に「望ましい」スキルである。さらに社会的スキル研究でよく見受けられる「円滑な対人関係」といった表現が示すように、社会的スキルがもたらす効果としてはどちらかというに関係志向的な面が中心に取り上げられており、自分にとって害悪を及ぼす相手から身を守るなどといった行為主体にとっての利益はあまり論じられてこなかった。

しかし実際の生活に即して考えてみれば「本来望ましいとされているスキル」を通状況的に高頻度を使用するということがどのくらい重要なのだろうか。日常生活での高次な社会性が要求される対人場面を想定すると、多様なスキルをポテンシャルとして有しており、状況の特質によって保持するスキルの中から特定のスキルを適宜行使したり、時には敢えて用いなかったりできることの方が重要で、現実的にも自然な振る舞いと考えられる。さらに、時にはこれまで望ましくなく「ネガティブ」とされてきたコミュニケーションスタイルを、状況によっては「敢えて」選択できるということが本人の精神的な健康及び相手との関係により良い結果を生む場合が予測で

きるのではないか。

それにも拘らずこれまでの社会的スキル研究では「状況から見たスキルの選択」自体には中心的な注意をあまり払っていない。また、「スキルを使わないこと」や「ネガティブなコミュニケーションスタイルをとること」「そもそもコミュニケーションをしようとししないこと」については初めからスキル不足・不適切な行動と片付けられ、その適応的な意味やそれ自体をスキルとして扱うことについては特に注目されてこなかった。

社会的スキルはその有用性がたやすく想像でき、またどの領域にも適用が容易なせいも、今や単なる道具として無批判的に扱われてしまっている。そのため社会的スキルを理論的に考察しようという努力が怠られてきたのではないか。ここにも社会的スキルの課題があると考えられる。社会的スキルが長期的な効果を持たないことも併せて考えると、これらの課題を整頓した上で、社会的スキルの概念・測定方法を再度見直し、新たな一面を加える必要があるだろう。

課題1：ネガティブコミュニケーション

コミュニケーションを円滑に進めようとししないこと・非主張的なこと全般をここでは「ネガティブコミュニケーション」とする。このネガティブコミュニケーションには、コミュニケーションの回避だけではなく相手に対する攻撃や、欺瞞も含まれる。従来こうしたネガティブコミュニケーションは不適応と結びつくものとして論じられてきた。例えば相川らは、孤独感の高い者は自らの経験の開示・意見表明が少なく会話への積極的参加の程度・相手の陳述に対してコメントや反応をする程度・相手への同意表現・質問を相手に返す程度が低い傾向にあると指摘する(相川・佐藤・佐藤・高山,1993)。

しかし近年になってコミュニケーションをとろうとししないことや、積極的に対人関係での問題を解決しようとししないことが常に意味の無い・良くないこととは必ずしもいえないことが指摘されている。例えば、会話中自分の考えや気持ちを「言わない」「言えない」といった発言抑制には、状況によって精神的健康を促進する側面もあることや(畑中,2003)、援助行動を行わない「非援助行動」の中には単なる愛他性の欠如だけではなく、「援助の手控え」動機によるものがあり、特に教育者などが子どもに対する長期的・間接的な効果の期待から、しようと思えば出来る「いま、ここで」の援助をあえて手控えることの重要性が示唆されている(原田1998)。

社会的スキル研究におけるネガティブコミュニケーションにあたるスキルの検討としては、鈴木・庄司(1990)が小学生・中学生を対象に、受け手が喜ぶ「正のスキル」と同時に受け手が嫌がるスキルとして「負のスキル」を取り上げたものがある。この結果を受けて作成された児童用社会的スキル尺度とソシオメトリーとの関係を検討した庄司(1994)によると、負のスキルは実際対人場面で用いられると必ずしもネガティブに評価されるわけではないこと(例えば遊び場面においてのからかい・妨害が仲間に受け入れられ評価されるなど)が示されている。この尺度を基にして大学生を対象としたものも作成された(庄司、1991)が、その後この尺度を用いた調査は見受けられず、負のスキルについてもそれ以降検討はされていないようである。

課題2：状況要因

社会的スキル研究では、定義・モデルを中心に状況要因についての言及がいくつかなされている。Hargie(1986)はArgyleのモデルに状況要因や個人的要因を加えて新たなモデルを提示し、社会的スキルの特徴としてスキル行動が状況に適切である必要性や、タイミングの重要性を述べて

いる。またVan Hasselt, Hersen, Whitehill & Bellack(1979)は、同じスキル行動でも状況によっては違う意味を持ちうることを指摘している。

状況や関係性に応じてコミュニケーションスタイルを変化させていくことや、その適応への影響はその他の領域でもいくつか指摘されている。言語学ではポライトネス (Brown, Levinson, 1987など)という観点から、相手との社会的距離によって言語的方略の種類が異なることが示されている。その他にも、特に日本においては「ウチ」「ソト」の区別がなされ、それによって対人態度や行動が異なることが指摘されている。例えば村本・山口 (2003) は自らの成功についての話し方はその相手が家族なのかその他の社会集団なのかによって変化し、家族に対してはより自己奉仕的・社会的集団の成員に対してはより自己卑下的になることを報告している。また、こうした行動面での変化の背景には、メタ認知的な働きの影響も考えられる。例えば対人認知の分野では、我々が「動機を持つ戦術家(motivated tactician) (Fiske & Taylor,1991)」であり、相手との力関係や状況によっていくつかの対人認知方略を巧みに切り替え、自らの統制感や自尊感情を維持することが示唆されている。我々は状況に応じて認知面・行動面共に適応的に変化させるのである。

しかしコミュニケーション時における状況の認知・関係性における社会的スキルの使い分けそのものを直接取り上げて扱った研究は殆どない。関係性の種類に応じた社会的スキルの検討としてはArgyle&Henderson (1985)が人間関係の種類を細かく分類し、それぞれの関係で必要とされるルール・スキルについて述べている。そこでは友人関係・恋愛関係・交際関係・同棲関係・結婚・離婚・親子関係・親族関係・仕事における人間関係・隣人関係が網羅されている。他にも特定の人間関係に限定した社会的スキルとして、堀毛(1994)による恋愛関係における社会的スキルの検討などがある。このように特定の関係に限定して通用するスキルを同定することは状況・関係性においてより適切な社会的スキルを取り上げることが出来る点で有効といえるが、当然のことながらこれだけでは日常生活における対人関係を全て網羅することは不可能なこと、このようにただ細分化してしまうことで本来同時期に複数の集団に属し、状況・関係性に応じて変化しているはずの個人の日常をぶつ切りにしてしまっていることなどの問題点が考えられる。

以上、社会的スキル研究の課題として2点を挙げた。社会的スキルとしてネガティブコミュニケーションを含めることや、状況要因を検討することが求められるが、その際には社会的スキル行使時におけるメタ認知について考慮しておくべきである。ネガティブコミュニケーションに拘らず社会的スキルを適切に選択し行使するに際して、同時に状況の認知を的確に働かせていることは不可欠であるといえる。また社会的スキルの行使を実施する際に、相手との関係性などを読み取る能力としてのメタ認知も必要と考えられる。

8. 「メタ・ソーシャルスキル」概念の提案

筆者は従来の社会的スキルの役割を補助・強化する概念として、自らの(ネガティブなものも含めた)社会的スキルのレパートリーや対人関係状況に対するメタ認知を働かせ、置かれている状況・相手との関係性(その長期的に見た展望も含めて)を判断した上でのスキルの適切な選択的行使・非行使を決定するスキルである「メタ・ソーシャルスキル」を提案している(図2)。

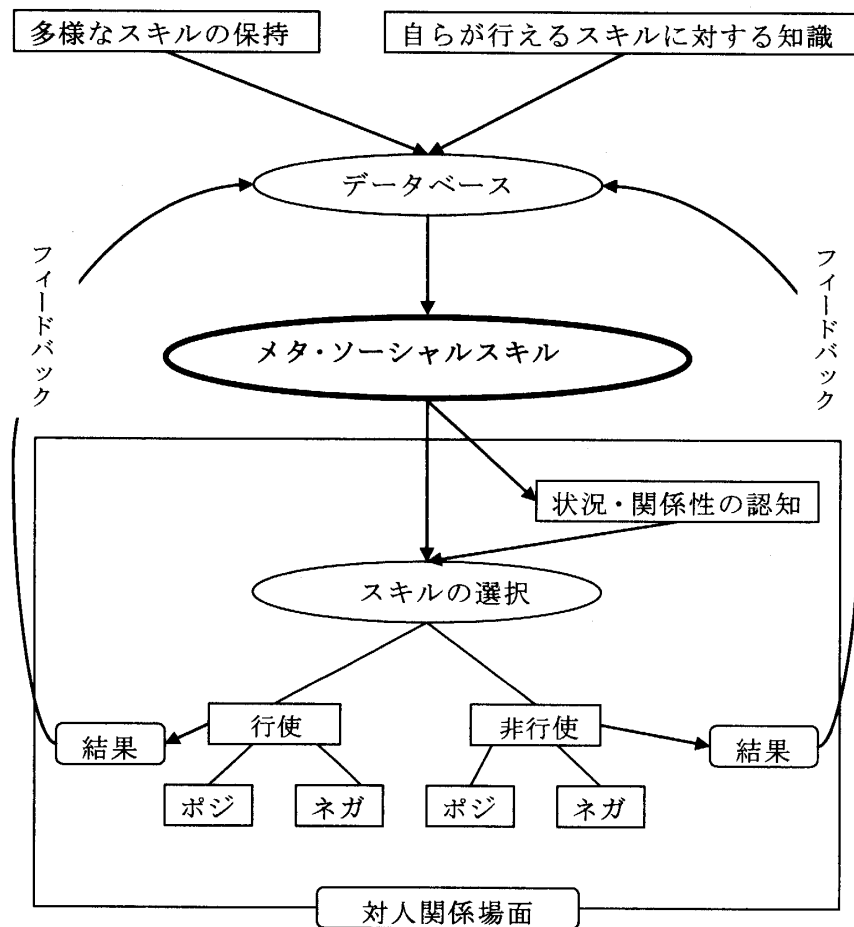


図2 「メタ・ソーシャルスキル」概念図

先に挙げたArgyleを初めとして、これまでも社会的スキルを一連の過程と捉え、状況の解読や判断も含めたモデルは幾つかあった。しかし日常生活における社会的スキルを全て網羅することは恐らく不可能なことを考えると、具体的なスキル行動の部分と社会的スキル行使を対象とするメタ認知の部分に明確に分けて捉える方が適切であろう。

発達段階や状況によって適切な社会的スキルは変化する。そのような中では、望ましいポジティブスキルだけでなく前述した通りのネガティブなスキルも含んだ豊かなスキルレパートリーが必要となるだろう。そして、そうしたポジティブ・ネガティブ両面のスキルを有した上で文脈に応じた社会的スキルを行使することが重要である。単にスキルをどれだけ獲得したかではなく、適切に上手く引き出すこと、より有効な行使まで敏感な態度を持つ思考の働きの上にスキルのレパートリーが成り立っていれば、スキルはより現実的、適応的な振舞いとなる。もちろん社会的スキルレパートリーの行動面での充実が「メタ・ソーシャルスキル」の発達を意味するものではなく、また「メタ・ソーシャルスキル」だけの発達によって社会的スキルのレパートリーの増加を意味するわけでもない。両者は並走しながらも独立して発達すると考えられる。「メタ・ソーシャルスキル」を実際の社会的スキルと独立した能力として提示することで、臨床場面などでよく問題にされる「スキルは獲得したもの、適切に行使することができない」といった状況に対する理

論的な説明を行うことができるようになるのではないか。

筆者は現在までの間に①欺瞞・回避・攻撃行動を含むネガティブなコミュニケーションを社会的スキルの一部として捉えることの妥当性②状況・関係性に応じたスキルの使い分けと適応との関連③自らのスキルや状況のメタ認知が、スキル行使と関わって社会的適応を説明することの3点を中心に調査を行ってきた。調査の概要は以下の通りである(石井、2005)。

①ネガティブコミュニケーションの実態調査

ネガティブコミュニケーションの日常事態における使用実態とその有用性を探った。ネガティブコミュニケーションである回避・欺瞞行動経験について18-34歳の男女104名を対象に自由記述での質問紙調査を、また攻撃行動経験について20-35歳の男女13名を対象に面接調査を行った。

その結果、9割もの人々が「ネガティブコミュニケーションを使用する」と答えた。また自らのネガティブコミュニケーションに対しては、ポジティブな評価が最も多く得られた。さらに、エピソードからネガティブコミュニケーションの長期的な関係維持に対する効果の可能性もうかがえた。結果から、これまで不適応とされてきた「ネガティブコミュニケーション」の有用性が示唆された。

②スキルの「使用頻度」「能力認知」「選択的非行使」と社会的適応との関係比較

18-35歳の男女111名を対象に、従来広く使われてきた社会的スキルの尺度Kiss-18(菊池、1988)について、今まで通りの使用頻度得点に加え、スキルの潜在能力認知(「やろうと思っただけ」)得点、さらにはスキルの選択的非行使(「あえて行わない」)得点について問い、自尊感情及び他者評価認知との関連を比較した。その結果、自尊感情・他者評価認知との関係が頻度に比して潜在的能力でより大きく見られた。さらに「潜在的能力-頻度」の差分と自尊心・他者評価認知との間に各々正の相関が見られ、「潜在的にスキルを豊かに保持してはいるがそれを行わない」、換言すれば「状況に応じてそれをあえて行わない」ということと社会的適応との関係も示された。

③社会的スキルの捉えなおし；ポジティブ・ネガティブスキルの特定

大学生ら306名を対象に、どのようなコミュニケーションスタイルが社会的スキルとして評価・行使されているのかを探る質問紙調査を行った。上の②で得られたネガティブコミュニケーション・従来の社会的スキルに挙げられているポジティブコミュニケーションに対して「適切さ」「使用頻度」評定を求め、日常事態で使用されている社会的スキルとしてまとめたところ、ネガティブコミュニケーションについてもスキルとして認知されていることが明らかとなり、社会的スキルとして「回避スキル」「主張スキル」「親和スキル」「儀礼スキル」が得られた。

④ポジティブ・ネガティブスキルの親密性別行使と各社会的適応との関係

「メタ・ソーシャルスキル」と社会的適応との関係について大学生ら306名を対象に質問紙調査を行い検討した。上の③の尺度を基にした「親密性高中低の相手に対するスキルの行使」尺度と、「メタ・ソーシャルスキル」の要素を定めて作成した「自らのスキル・状況のメタ認知」尺度を併せて「メタ・ソーシャルスキル」の測定尺度とし、社会的適応の各指標についてそれぞれ関係を調べた。その結果比較的自由度が高く、より高次とも解釈できる「親和スキル」では、メタ認知を働かせた上で関係性に応じた使い分けを行う＝「メタ・ソーシャルスキル」の高いことが適応と関係することが分かった。

以上の結果からすると、「メタ・ソーシャルスキル」は社会的スキルの弱点を克服する概念として期待できるだろう。しかしネガティブコミュニケーションの明確な概念化やスキル行使・メタ認知の測定尺度の妥当性など検討の余地もあり、今後さらに精緻に概念化をはかることが要される。

また、先に挙げたEIと「メタ・ソーシャルスキル」の概念的関わりについても検討していく必要がある。社会的スキルと同様、部分的に重なるところもあるが、「メタ・ソーシャルスキル」はあくまで現実の行動・社会的スキル行使に焦点を当てているため、「対人関係場面で、相手に対して実際の行為を投げかけること」に関わる部分を検討することができる。つまり注目する面が絞り込まれており概念化が明確なため、これまでEIで難しいとされてきた簡便で妥当な測定尺度の実現が可能になるかもしれない。しかし現段階ではまだその詳細は明らかにされておらず、今後実証的に調べる必要がある。この「メタ・ソーシャルスキル」とEIの重なりと差異を整頓することによって、我々の生活における社会的適応をよりリアルに説明することが可能となると考えている。

引用文献

- 相川 充 (1999) 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, 14,95-105.
- 相川 充 (2000) 人づきあいの技術 社会的スキルの心理学 セレクション社会心理学-20 サイエンス社
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993) 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究 ―孤独感と社会的スキルとの関係― 社会心理学研究,8,44-55.
- Argyle,M.(1967) *The psychology of interpersonal behavior*. Penguin books. (M.アージル (著) 辻 正三・中村陽吉 (訳) 1972 対人行動の心理 誠信書房)
- Argyle,M. & Henderson,M. (1985) *The Anatomy of Relationship And the rules and skills needed to manage them successfully*. Penguin books. (M.アーガイル/M.ヘンダーソン (著) 吉森護 (編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房
- Argyle,M.& Kendon,A.(1967) The Experimental Analysis of Social Performance in Berkowitz,L.(Eds) *advances in Experimental Social Psychology*, 3,(pp55-98) Academic Press.
- Bar-On, R.(2001) Emotional Intelligence and Self-Actualization In J .Ciarrochi , J. P.Forgas, & J. D. Mayer (Eds.)*Emotional Intelligence in Everyday Life : A Scientific Inquiry* (pp82-97) Psychology Press.
- Brown,P.&Levinson,S.C.(1978)*Politeness : some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Burmester,D.,Furman,W., Wittenberg,M.T. & Reis, H.T.(1988)Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55,991-1008.
- Ciarrochi, J., Chan, A., & Caputi,P.,Roberts, R (2001) Measuring Emotional Intelligence In J .Ciarrochi , J. P.Forgas, & J. D. Mayer (Eds.) *Emotional Intelligence in Everyday Life : A Scientific Inquiry* (pp25-45) Psychology Press.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野 星 (2000) 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究 23, 22.
- Fisk,S.T., & Taylor,S.E. (1991) *Social Cognition*. 2nd ed. McGraw-Hill.
- 藤枝静暁・相川 充 (2001) 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究,49,371-381.

- Goleman, D. (1995) *Emotional Intelligence*, Bantam Books (D.ゴールマン(著) 土屋京子(訳) 1996 EQ 心の知能指数 講談社)
- 後藤 学・宮城速水・大坊郁夫 (2004) 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討—得点変化のパターンにみる参加者クラスタリングの試み— 電子情報通信学会技術研究報告 104, 7-12.
- Hall, W.E. & Gaeddert, W. (1960) Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*, 96, 269-273.
- 原田純治 (1988) 援助手控えの援助性認知に関わる要因に関する研究 長崎大学教育学部 教育科学研究報告, 54, 75-85.
- Hargie, O. (1986) Communication as skilled behavior. In Hargie, O. (Eds) *A Handbook of Communication skills*. Croom Helm.
- 畑中美穂 (2003) 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究, 74, 95-104.
- 堀毛一也 (1990) 社会的スキルの習得 斎藤耕二 菊池章夫 (編) 社会化の心理学 ハンドブック 人間形成と社会と文化 川島書店 pp79-100.
- 堀毛一也 (1991) 社会的スキルとしての思いやり 菊池章夫 (編) 現代のエスプリ 291 思いやりの心理 至文堂 pp150-160.
- 堀毛一也 (1994) 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 五十嵐 祐 (2002) CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究, 17, 97-108.
- 石井佑可子 (2005) 社会的適応における「メタ・ソーシャルスキル」の役割 —スキルを操るスキル— 京都大学大学院教育学研究科 修士論文 (未刊行)
- Izard, C.E (2001) Emotional Intelligence or Adaptive Emotions? *Emotion*, 1, 249-257.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 菊池章夫 (1994) 社会的スキルを測る Kiss-18のこと 菊池章夫 堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学 100のリストとその理論 川島書店 pp177-191.
- 木村昌紀 磯 友輝子 大坊郁夫 (2004) 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告, 104, 1-6.
- Lopes, P. & Salovey, P. (2004) Toward a Broader Education: Social, Emotional, and Practical Skills. In J.E.Zins, R.P.Weissberg, M.C.Wang, H.J.Walberg, (Eds) *Building academic success on social and emotional learning. What does the research say?* (pp. 76-93). Teachers College Press.
- Mayer, J. D., Caruso, D., & Salovey, P. (1999). Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. *Intelligence*, 27, 267-298.
- Mayer, J. D., DiPaolo, M. T., & Salovey, P. (1990). Perceiving affective content in ambiguous visual stimuli: A component of emotional intelligence. *Journal of Personality Assessment*, 54, 772-781.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds). *Emotional Development and Emotional Intelligence: Implications for Educators* (pp. 3-31). Basic Books.
- Mayer, J. D., Salovey, P., & Caruso, D. R. (2000). Models of emotional intelligence. In R. J. Sternberg (Ed.). *Handbook of Intelligence* (pp. 396-420). Cambridge University Press
- Mayer, J.D., Salovey, P., & Caruso, D.R. (2004) Emotional intelligence: Theory, findings, and implications. *Psychological Inquiry*. 15, 197-215.
- 村本由紀子 山口 勸 (2003) "自己卑下"が消えるとき—内集団の関係性に応じた個人と集団の成功の語り方— 心理学研究, 74, 253-262.
- Salovey, P. & Mayer, J.D. (1990) Emotional intelligence. *Imagination, Cognition & Personality*, 9, 185-211.
- Salovey, P., Mayer, J.D. & Caruso, D. (2002) The positive psychology of emotional intelligence.

- In Snyder, C.R. & Lopez, S.J. (Eds) *Handbook of positive psychology*. (pp. 159-171). Oxford University Press.
- Segrin, C. & Abramson, L.Y. (1994) Negative Reactions to Depressive Behaviors: A communication Theories Analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 655-668.
- 庄司一子 (1991) 社会的スキル尺度の検討—信頼性・妥当性について— 筑波大学紀要 教育相談研究, 29, 18-25.
- 庄司一子 (1994) 子どもの社会的スキル 菊地章夫 堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学 100 のリストとその理論 川島書店 pp 202-218.
- Spitzberg, B.H. & Cupach, W.R. (1988) *Handbook of interpersonal competence research*. Springer.
- 鈴木聡志・庄司一子 (1990) 子どもの社会的スキルの内容について 筑波大学紀要 教育相談研究, 28, 24-32.
- Trower, P., Bryant, B., & Argyle, M. (1978) The analysis of social behavior. In Trower, P., Bryant, B., Argyle, M. & Marzillier, M. (Ed) *Social skills and mental health*. Methuen (pp 7-34)
- Van Hasselt, V., Hersen, M., Whitehill, M. & Bellack, A. (1979) Social skill assessment and training for children: an evaluative review. *Behavior Research and Therapy*, 17, 413-437.
- 和田 実 (1991) 対人有能性に関する研究 —ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- Witt, L.A. & Ferris, G.R. (2003) Social skill as Moderator of the Conscientiousness-Performance Relationship: Convergent Results Across Four Studies. *Journal of Applied Psychology*, 88, 809-820.
- Zsolnai, A. & Jozsa, K. (2003) Possibilities of criterion referenced social skills development. *Journal of early childhood research*, 1, 181-196.

(教育方法学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日)

Recent Trends and Some Problems of Social Skill Studies: Toward Conceptualization of "Meta-Social Skill"

ISHII Yukako

"Social skill" is one of the indicators to measure sociality, and it is regarded as important. A general concept of a Social skill is loosely based on the idea of 'appropriate actions in social situation depend on skills that individuals have'. Many studies have shown the relation between Social skills and successful psychological adjustments in various domains. Public interest in Social skills is also high. Social skill is a promising idea. However, can researchers study in accord with our actual life? In addition, how much does Social skill affect adaptations in a realistic meaning in our everyday life? This article reviews the flow of Social skill studies and describes some problems at present. I put roles of a social skill considering a relation with Emotional Intelligence which is a similar notion. Furthermore, I propose the general idea of 'Meta-Social skill' as a concept to reinforce and sustain impact of Social skill's on our social adaptation. That is a skill to Meta recognize one's skills and the situations and to choose an appropriate skill.